

実践報告 (Report)

主体的・協働的に学ぶ言語活動の日常化を目指して

——高1 国語総合「新書を読もう・伝えよう」実践報告——

Aiming to make everyday language activities independent and cooperative: Report on the reading and discussion of small-sized paperback books in the comprehensive Japanese language course for the first year of high school

田中 洋美*
TANAKA, Hiromi*

摘 要

本実践は、学校図書館を活用した読書指導について、生徒がより主体的かつ協働的に学ぶことを目的として、主に「アクティブ・ラーニング」の視点から、従来の指導方法及び評価の見直しを試行したものである。高校1年「国語総合」の「新書を読もう・伝えよう」(2単元で構成、計5時間)は、関心のある分野から新書を幅広く選び、読了後、観点を明らかにして紹介する言語活動である。本単元では、探究的な学習の過程を踏まえ、「国語総合」の「読むこと」(「学習指導要領」(I)才、読書をして考えを深めること)と「話すこと」(同(I)エ、表現について考察したり交流したりして、考えを深めること)を関連させて指導した。その結果、自分で選んだ1冊について、要点を明確にし、「伝え合う」過程で、新たな読書に対する意欲・関心を喚起することができた。また関連して指導した「話すこと・聞くこと」では傾聴の大切さを学ぶとともに適切な「問いかけ」がより相互理解に役立つことを確認できた。今回の実践で得られた課題を生かし、生徒の実態を見極めながら、今後生きる言語運用能力や思考力を継続して育成したい。

キーワード：読書指導，アクティブ・ラーニング，探究的な学習の過程，新書

Key words：reading instruction, active learning, the process of inquisitive learning, small-sized paperback books

1. はじめに

2009年3月に告示された「高等学校学習指導要領」が年次進行で実施されて3年目になる。現在、指導と評価の一体化、言語活動の充実、思考力・判断力・表現力の育成など現行「学習指導要領」で示された課題の具現化に取り組む一方で、2014年11月「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」(文部科学大臣より中教審への諮問)、2015年8月、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会における論点整理に示された課題(育成すべき資質・能力を

* 椋山女学園高等学校

紹介教員：大森隆子、椋山女学園大学教育学部/椋山女学園高等学校校長

「三つの柱」で整理すること、「アクティブ・ラーニング」の視点から学習・指導方法と評価の改善、「カリキュラム・マネジメント」の重要性など）をも視野に入れ、不断の試行と改善が求められている。

この時機に際し、現行の言語活動を重視した学習活動の成果と課題を整理し、その見直しを図る必要がある。そこで、今回、高校1年「国語総合」において現行「学習指導要領」に先行して設定した言語活動「新書を読もう」の見直しを試みた（図1）。2015年5月26日～7月2日に全10クラス（397名）で実施し、担当したクラスは2クラス（78名）である。年間指導計画における単元の目標「主体的・協働的に学ぶ姿勢・意欲を養うこと」を踏まえつつ、以下の3点を主に見直した。

① 単元の指導目標と言語活動の見直し

- ・学校図書館の活用に加え、「次の1冊」を見つけ、読書を継続する意欲を養う。
- ・探究的な学習の過程を基軸とし、主体的に学ぶ姿勢を養う。

② 観点別評価の具体化

- ・「過程」を指導し、見取ることで、評価を次の指導に速やかに反映する。

③ 協働的な学習の設定

- ・課題解決に役立てると同時にコミュニケーションに必要なスキルを育成する。
- ・並行する単元でも協働的な学習を取り入れることにより日常化を図る。

本稿は、指導の実際と言語活動の充実のための工夫及び具体的な評価について報告し、今後の課題を見出すことを目的とする。

2. 本実践のねらい

読書を通じて考えを深めることに関する指導（「国語総合」「読むこと」(1)オ）を展開する際、原動力となるのは生徒自身の「これが知りたい」という明確な探究心である。目的意識を持って学習活動を進め、次なる課題を見出すことで「もっと読みたい」という読書に対する関心が高まる。これこそが主体的に学び続ける基盤となる。

「新書を読もう・伝えよう」（2単元で構成、計5時間）は、関心のある分野から新書を幅広く選び、読了後、観点を明らかにして紹介する言語活動である。探究的な学習の過程を踏まえ、「国語総合」の「読むこと」(1)オ（読書をして考えを深めることに関する指導事項）と「話すこと」(1)エ（表現について考察したり交流したりして、考えを深めることに関する指導事項）を関連させて指導することで、より主体的かつ協働的に学ぶ姿勢を養うことを目的とする。（図1：「新書を読もう*伝えよう新聞」は、第2単元第3次でふりかえりの教材として使用したものである。）

2-1. 単元を設定する上での工夫

① 「新書を読もう」（2012～14年度）から「新書を読もう・伝えよう」（2015年度）へ

今回の実践に先立ち、本校においては幅広い選書と読書習慣の定着をねらい、2012

149

表1 「新書を読もう」(2012～14年度)から「新書を読もう・伝えよう」(2015年度)へ

単元名	実施年度	課題設定	情報収集	分析・整理	まとめ・発表
「新書を読もう」	2012～14	キーワードを挙げる。	①新書マップ ② OPAC ③ブラウジング ④選んだ新書	KWLチャートを活用	ブックレポート
「新書を読もう・伝えよう」	2015	「知りたいこと」(読む目的)を明確にする。			ブックレポート ↓ 1分間スピーチ

②探究的な学習の過程を基軸とし、PISA 型読解プロセスを確認しながら思考力を高めること

探究的な学習の過程と PISA 型読解プロセスを重ね合わせて指導する意図は次の 2 点である。第一に単元を構想する上で、生徒の活動内容と思考の流れを重視し、導入時に 5 時間の学習活動の内容を探究的な学習の過程として生徒に提示した。それぞれの活動の目的を明確に捉えさせると同時に、関連性を意識して積み上げていくイメージを持たせ、単元を通じてつきたい力を共有することを狙う。

第二に PISA 型読解プロセスを確認しながら、選書する分野の「幅広さ」のみならず、本を入手する方法や場の「幅広さ」についても実現を目指すためである。課題設定までの過程と情報の分析・整理の過程を重点的に指導し、論理的な思考に欠かせない情報の抽出・分析の基礎的な方法とその思考の過程を確認する。

どのような本を選び、どのようなテーマを設定するか思考し、得た情報が目的に合うか否かを判断し、内容やそこから得た発想を効果的に表現する過程を通して、自分の読みを振り返り、新たな一冊を見出す場としたい。尚、PISA 型読解力向上に関わる指導事項(文部科学省『読解力向上に関する指導資料』, 2005 年 1 月)については、次の点を踏まえて指導する。下記に挙げる「ア」～「ウ」の項目は、同書「2 読解力を高める指導例」内「(1)指導のねらい」(p. 15-18)に示される記述と対応している。また具体的な指導の場面と探究的な学習の過程との関連は下記の表(表 2, 表 3-1, 2)の通りである。

第 1 単元「新書を読もう」

- ・ウ 様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実すること
 - (ア) 多様なテキストに対応した読む能力の育成
- ・ア テキストを理解・評価しながら読む力を高めること
 - (ア) 目的に応じて理解し、解釈する能力の育成

第 2 単元「新書を伝えよう」

- ・イ テキストに基づいて自分の考えを書く力を高めること
 - (ア) テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成

- ・ウ 様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実すること
- (イ) 自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力の育成

表2 PISA 型読解力向上に関わる指導について

	①情報へのアクセス 取り出し	②テキストの 統合・解釈	③テキストの熟考・評価	
「指導の ねらい」	ウ(ア)	ア(ア)	イ(ア)	ウ(イ)
探究的な 学習の過程	課題設定	情報収集	分析・整理	まとめ・発表
	①新書マップとOPAC を活用し、目的の 新書を入手する。 ②目次等から概要を 知る。	選んだ新書を 目的に応じ、 読解する。	ブックレポー トからフリッ プ、スピーチ に再構成する。	①フリップを 使い、1分間 スピーチを行う。 ②相互評価する。

表3-1 単元の概要

1 科目名 国語総合	2 対象学年 1 学年	
3 単元名 新書を読もう・伝えよう		
4 単元の目標 〈第1 単元「新書を読もう」〉 ・読む目的を明確にして幅広く本を読み、情報を適切に用いたり、発表を通じて読書に対する関心を深めようとしたりする。(関心・意欲・態度) ・自己の関心を広げ、幅広く本を読み、必要な情報を用いたり、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにしたりする。(読む能力(1)オ) ・語句の意味、用法を的確に理解し、語彙を豊かにするとともに、自分の表現に役立てている。(知識・理解)		
○関連する指導事項 〈第2 単元「新書を伝えよう」〉 ・発表や取り組みのふりかえりを通して、他の生徒の作品や意見から新たな課題を見出し、自己の読書や表現に生かそうとする。(関心・意欲・態度) ・勧める相手や理由を明らかにして本を紹介し、その発表に対し自己評価や相互評価を行い、ものの見方や感じ方、考え方を豊かにする。(話す能力・聞く能力(1)エ) ・語句の意味、用法を的確に理解し、適切に表現している。相手を意識することで効果的に表現できることを理解している。(知識・理解)		
5 取り上げる言語活動と教材 (1)言語活動 各自で関心のある分野から幅広く新書を選び、読了後、観点を明らかにして互いに紹介する。また発表について自己評価及び相互評価を行う(「読むこと」(2)イ、関連指導事項「話すこと・聞くこと」(2)アによる)。 (2)教材 探究的な学習の過程を示すワークシート (A3判)、発表で用いるミニ・フリップ (A5判) などである。図書館では主に連想検索ができるインターネット上の検索システム「新書マップ」を利用した。		
6 具体的な評価規準		
〈第1 単元「新書を読もう」〉		
関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
読む目的を明確に課題として設定し、幅広く本を読み、情報を適切に用いたり、発表を通じて読書に対する関心を深めようとしたりしている。	自己の関心を広げ、「新書マップ」、OPAC等検索のそれぞれの特性を理解して本を幅広く求め、必要な情報を取り出し、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにする。	語句の意味、用法を的確に理解し、語彙を豊かにするとともに、自分の表現に役立てている。
〈第2 単元「新書を伝えよう」〉		
関心・意欲・態度	話す・聞く能力	知識・理解
2 回行う班発表や取り組みのふりかえりを通じて、他の生徒の作品や意見を自己の読書や表現に生かそうとしている。	勧める相手や理由を明らかにして本を紹介し、その発表に対し自己評価や相互評価を行い、ものの見方や感じ方、考え方を豊かにする。	語句の意味、用法を的確に理解し、適切に表現している。 相手を意識することで効果的に表現できることを理解している。

表3-2 指導の計画

探究の過程	単元	次(時)	学習活動	指導上の留意点(評価の規準と方法)
課題設定	「新書を読もう」	第1次(1時)	○キーワードを出そう 1. ガイダンス 単元の目標を理解し、学習の見通しを持つ。 2. キーワードを出す ・インタビューゲームで柔軟に発想する。(3人班) ・ドーナツ・チャートを用いて、語を書き出す。 ・連想される語を上位概念、下位概念に分ける。(ペア)	・「取り組みの流れ」を用いて、探究的な学習の過程を理解させる。 ・特に今回の「課題設定」とは「読む目的(自分の知りたいこと)を明確にすること」までの過程を含むこと、「まとめ・発表」ではブックレポートを再構成して1分間スピーチを行うことを知らせておく。 【評価の規準】 語句の意味、用法を的確に理解し、語彙を豊かにするとともに、自分の表現に役立てている。(知識・理解) 【評価の方法】 ワークシートの記述の確認
		第2次(1時)	○「新書マップ」を使おう(図書館で検索実習) 1. 「新書マップ」活用ガイダンス 本時の目標と学習の手順を理解する。 2. 連想検索システム「新書マップ」で検索する。 ・「新書マップ」で連想検索し、自分の関心のある分野やテーマを明確にする。 ・関心を持った新書について、著者名、書名、出版社を記録する。 3. OPACで蔵書検索を行う。 ・有無を確認し、分類記号、配架場所を記録する。 4. ブラウジングしながら選書し、序や目次を見ながら検討する。 5. 取り上げる1冊が決まったら、目次を見ながらKWLチャートの「K」「W」欄に記入し、課題を設定する。 6. ふりかえりを記入する。	・「新書マップ」を活用し、知りたいことを明確にしていくよう助言する。 ・進捗状況に差が出やすいことを考え、6人班で相談しながら進めるよう指示する。 【評価の規準】 「新書マップ」、OPACのそれぞれの特性を理解し、必要な情報を取り出し、関心のある分野からより適した一冊を選び、ものの見方、考え方を豊かにしている。(読む能力) 【評価の方法】 ワークシートの記述の確認(「W」の記述内容が具体的に) 行動の確認
情報収集	「新書を読もう」	(読書レポート作成は家庭学習で行う)	○情報収集 ・1週間をめどに読み進め、読んで分かったことを「L」に記録する。 ・「エントリーカード」に記入する。	・読書及びその記録、情報の整理分析は、家庭学習とする(他の単元を並行して行うため)。そのため、時機を見て進捗状況を把握し、指導を要する場合は早めに対応する。 ・筆者の主張を的確に理解するとともに、無批判に受け入れるのではなく、必要であれば他の情報を得て検討することも併せて指導する。 ・適切な引用の仕方を確認し、筆者の主張と自分の意見は明確に分けるよう指導する。 ・「エントリーカード」は回収後、全員分を貼り、発表時のブックリストおよび班編成の資料として活用する。 【評価の規準】 目的に応じ、幅広く本を読み、情報を適切に用い、ものの見方、考え方を豊かにしようとしている。(関心・意欲・態度) 【評価の方法】 ワークシートの記述の点検(「W」「L」、ブックレポート) 「エントリーカード」の記述の点検
整理・分析		第1次(1時)	○1分間スピーチの準備 ・ワークシートを見直し、「勧めたいポイント」を明らかにして再構成する。 ・発表の手順を理解する。 ・NHK「伝達の極意」(「1分間で伝えよう」)を視聴し、短い時間で伝えるポイントを理解する。 ・ミニ・フリップとスピーチの内容を考え、準備を進める。	・スピーチの構成で躓く生徒には2つ「型」を例示し、考える手がかりとする。 【評価の規準】 得た情報を精選し、相手を意識した内容で構成するために必要なことを理解している。(知識・理解) 【評価の方法】 行動の確認(視聴の様子、フリップや原稿作成の様子)
まとめ・発表		第2次(1時)	○ミニ・フリップ(A5判)を用い、1分間スピーチを行う。 ・発表の手順を確認する。 ・発表者(1分間でスピーチする)、コメンテーター、ジャッジを順に担当する。(スピーチの後、コメント、そのあとフリートークで2分程度) ・話題が重ならないように6(～7)人班を組み、1回目を行う。 その後、さらに分散させ、2回目を行う。 ・ジャッジは「勧める理由や本の内容が明確か」「興味・関心がわいたか」を相互評価する。 ・ふりかえりとして自己評価と「次に読みたい1冊」の選出を行う。	・役割を理解して、相手を意識して話したり、聞いたりのよう適宜、助言する。 【評価の規準】 勧める相手や理由を明らかにして本を紹介し、その発表に対し自己評価や相互評価を行い、ものの見方や感じ方、考え方を豊かにしている。(話す能力・聞く能力) 【評価の方法】 行動の確認(発表時)、ふりかえりシートの記述の点検、分析
ふりかえり	「新書を読もう」	第3次(1時)	○「新書を読もう*伝えよう」新聞でふりかえり 1. 「次に読みたい本」に挙げられた発表の要点を共有する。 2. 各自のふりかえりを読み。今後の読書や発表などに生かしたい点を交流する。	・「次に生かしたい」意欲を他の言語活動でも発揮できるように気づかせる。 【評価の規準】 ふりかえりを共有し、他の生徒の作品や意見を自己の表現に生かそうとしている。(関心・意欲・態度) 【評価の方法】 行動の観察

3. 学習指導要領との関連（取り上げる指導事項と指導の工夫）

3-1. 読書をして考えを深めることに関する指導事項（「読むこと」(1)オ）

「学校図書館などと連携した読書指導により、できるだけ多くの種類の文章に接する機会を持たせること」について

本校の場合、朝の読書をはじめ、HR 読書会（年2～3回）など HR 活動に加えて、授業で図書館を利用することも多い。国語科としては読書ノートを通して3年間の継続した読書を支援したり、教材と連動した展示の企画を依頼したりと常日頃から密に連携するよう心掛けている。

今回は図書館司書と事前に昨年度の反省をもとに、6人班で協働しやすい机の配置や生徒の目に新書が触れやすいよう、書庫と開架式書棚、展示棚等の動線等を打ち合わせた。また10クラス（生徒397人）で同時期に行うため、互いに授業に参加し、展開の変更を考えるなど教科担当教員間の協働も欠かせない。それを踏まえて図書館司書と遅れた生徒の支援や貸出状況について相談するなど、教員と司書が速やかに対応できる体制づくりを継続する必要がある。生徒が選んだ新書は集約し、そのリストを図書館と共有し、生徒の関心のありかを今後の選書や企画に生かせるよう連携していく。

3-2. 本を「幅広く」手に入れる過程に関わる指導事項（「読むこと」(1)オ）

同指導事項では「幅広く本や文章を読む」の「幅広く」について、文章の内容や分野の「幅広さ」と次に本や文章を手に入れる方法や場の「幅広さ」の二義を含むとしている。

本単元は当初（2012年度）から自己の関心事からより幅広い分野に目を向けて図書を選択させることを意図しているが、今回、再考するにあたり、後者の「幅広さ」についても実現できるよう課題設定（図書を選び、読む目的を設定すること）までの過程の指導に重点を置いた。①「検索」に至るまでの過程に「連想」を用いる作業を入れ、柔軟に発想すること。②適切なキーワードが出しにくい生徒の実態を踏まえ、連想検索システムを検索に用いた上で OPAC とブラウジングを有機的に組み合わせること。③互いに交流しながら進められるよう協働的な学習形態を設定すること。以下に、①、②について具体的に述べる。（③については次章を参照のこと）

①「検索」に至るまでの過程に「連想」を用いる作業を入れ、柔軟に発想すること

初動において自由に発想し、あらゆる可能性について考えることが豊かな創造の源である。だが、関心のある事柄について「キーワード」をいきなり書き出そうとしても、柔軟に思考できない生徒もいる。そこで対策として、まずドーナツ・チャートを提示し、キーワードを多く出すことが幅広い検索に繋がることを説明した。6つの空欄を前に「こんなにたくさん（思いつかない）」「いっぱい書ける」と反応はまちまちだが、「いきなりこれほど書けそうにない」という窮状を共有することが大切である。

この窮状から協働して脱する方法として3人班でインタビューゲームを行った。1

回目は「あなたの好きな〇〇は何ですか？ 理由も話してください。」。2 回目は「あなたのおすすめの〇〇は何ですか？ 理由も話してください。」（ともに例示した選択肢（食べ物、スポーツ、場所、映画、音楽など）を参考に発問する）。役割は質問者、回答者、観察者（具体的で明確な理由が答えられるかを観点とし、発問、回答の工夫を考える役割）とした。

楽しく交流した後、各自でドーナツ・チャートを書き出すと、触発されたためかスムーズに 6 マスを埋めることができた（図 2）。94.5%の生徒が 6 マスを埋めることができた。また連想される関連事項の書き出しを終えた後、上位概念と下位概念に分ける際はペアで確認しあい、思いつかない時は意見を出し合うよう促した。その際、「小さくくり」（上位概念）は赤色で、「小さなことから」（下位概念）は青色で丸をつけていくと、漏れや偏りが見出しやすく、互いに指摘するきっかけにもなった。

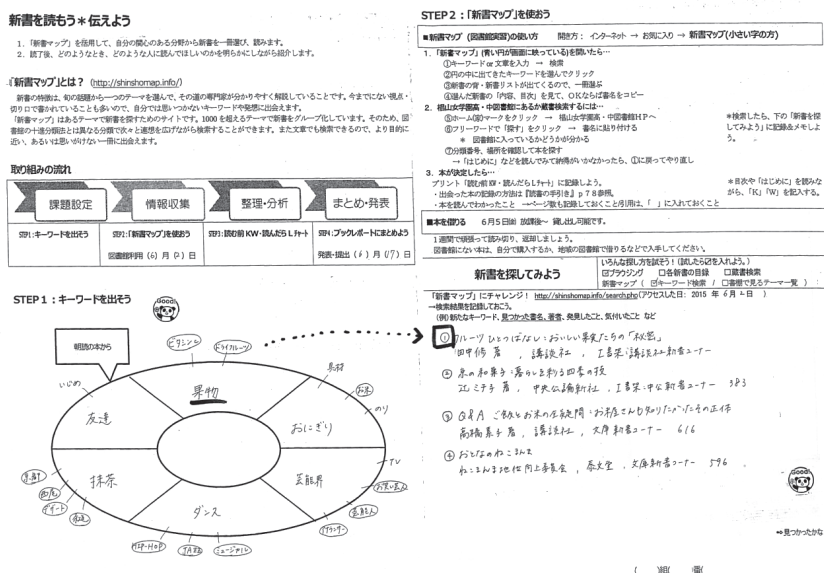


図2 着想から選書までの過程（ドーナツ・チャートと検索記録）

②連想検索「新書マップ」の活用と OPAC、ブラウジングの組み合わせ

①の下準備のもと、インターネット上の連想検索システム「新書マップ」¹⁾を活用した。「新書マップ」の大きな利点は①語、文節、文、文章のいずれでも検索結果が得やすいこと、②最初の検索結果がテーマ例で示され、自分の課題に照らしてより近いものを選ぶという試行錯誤の場面があること、③書棚形式の表示から 1 冊を選ぶと書誌、概要、目次が表示され、この段階でも目的に適合しているか検討できることである。

つまり、一度の検索で求める本が見つからなくても、その過程で意外な関連テーマに触発されたり、自分の課題を見直したりという思考の経過があるため、次に検索できる手がかりを得られる²⁾。この「幅のある検索」により、得られた情報を OPAC で

検索し、分類番号を手がかりにブラウジングすると生徒が当初、予想していたよりも多くの本が目に入る。その結果、検索と図書探しが楽しく遂行できることを狙った。この時間終了時までに見当ての本を入手することができた生徒は89.5%である。

現在、生徒にとって「検索」とは情報端末に「話しかける」行為になりつつある。また一、二文字入力すると瞬時に予測される検索語彙の候補が並ぶ。この「与えられた選択肢」から選び、画面をタッチまたはクリックすることを繰り返し、目的の情報に到達する。つまり、ナビゲーションされた、ごく限られた情報の選択こそが日常的な「検索」と化している。

このような環境において、生徒にとって従来のキーワード検索を行う場合、適切な語を挙げることは難しくなっている。その実態は先行した図書館オリエンテーションで行った「ジャパンナレッジ」とOPACを利用した実習や授業における電子辞書の利用状況で把握していた。この状況に対する対策としても、より主体的に考え、柔軟に発想できる検索方法や思考方法を習得することは、今後、活用できる汎用スキルの一つとして大きな意味をもつものとする。

3-3. 表現の交流を通して自己評価や相互評価を行い、ものの見方や考え方を豊かにすることに関する指導事項（「話すこと・聞くこと」(I)エ）

勧めたい相手と理由を明確にしてミニ・フリップ（A5判）を作成し、1分間スピーチを行った。1分間でスピーチし、1分間でコメントと意見交流を行う。目標は「次に読みたい1冊を見つけること」である。まず、話し手、聞き手ともに相手を意識することを確認した。また発表時は話し手、コメンテーター、ジャッジの役割を与え、相互評価が円滑に行えるよう配慮した。特にコメンテーターは①話した内容の確認を行った上で、②ひとこと（気づいたこと、質問など）を話すよう指示した。そのため、要点が全員で共有でき、その後の意見交換も活発に行うことができた。

4. 言語活動の充実のための工夫

4-1. 探究的な学習の過程の「見える化」（探究的な学習の基盤づくり/PISA型読解プロセス）

①学習活動を見通すことの重要性

従来、読書して得たことを報告、発表する言語活動を指導する場合、「選書」、「読書」、「レポート作成」、「発表」といった生徒が何を行うのかの作業指示とその締め切りの提示が主であった。この場合、生徒は「いつまでに、何を行うのか」を理解し、時間的に限られた学校生活の中で作業を遂行することは成し得るだろう。しかし、その言語活動で習得したスキルや知識を次の学習に生かす意欲や更なる課題を見出す意欲を涵養できるであろうか。今後、求められるのは、自ら課題を見出し、よりよい解決に向けて学び続ける力である。ここに着目し、今回、導入の段階で、生徒に探究的

な学習の過程の習得を目的の一つとして提示し、見通しをもって取り組むよう工夫した。

②学びの手順と成果の「見える化」

ワークシート（A3判・両面刷り）で課題設定から情報収集、分析、まとめの過程を記録できるよう構成した。発想を促すためにドーナツ・チャートを、課題の明確化及び情報の整理のため、KWL チャートを活用した。これにより、生徒は手順が明示されているので、次の学習過程に移行しやすい。また、全体を通して探究的な学習のプロセスを確認できるので再現性が高く、他の言語活動に活用できる。

さらに教員が評価する際、①その時間の達成度が把握しやすいこと、②両面で着想から検索結果や実際に読んだ本までの経過が見て取れるので、生徒の思考および試行の結果が検証できること、③裏面の KWL チャートからブックレポートで課題設定、情報収集、情報の整理・分析、まとめの過程が一目で分かるので、生徒と教員が問題点を共有しやすく、失敗や躓きも今後の学習に生かすよう前向きに指導できる。

今回は探究的な学習の過程を基軸として PISA 型読解プロセスを確認しながら展開した。このワークシートは、特に課題設定に至る場面で必要な情報にアクセスできているか否かの確認に有効であった。今回は本を入手するために複数の情報源にアクセスし、そこで試行錯誤した上で必要な情報を取り出し、配架の情報と分類番号を手掛かりに探索しなければならない。いずれかの段階で情報に的確にアクセスできていない、もしくは情報が十分に引き出せていない場合はそこから再度、やり直すことで、所期の目的の図書を見つけられる可能性は高くなる。

③論理的な思考を育成する手立てとして

今回は読書レポートの中から、必要な情報を取捨選択して 1 分間スピーチを構成する。この過程は PISA 型読解プロセスにおける情報の分析・整理の過程にあたる。国立教育政策研究所教育課程研究センター「特定の課題に関する調査（論理的な思考）調査結果」（2013 年 3 月）によれば、「必要な情報を抽出し、分析する」力などに係る問題の通過率は、「全問題の平均通過率を下回った」（p. 3）ことが報告されている。特に「学習指導要領との関係（例）」に「国語」の「目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析・整理する」ことが挙げられる調査 I 内容 B「階段の段数」では「選んだ情報を手掛かりにした問題解決を行なうことができない」（p. 65）、また、正解を求めることができていても「その思考過程では不要な情報を適切に捨てることができない。」（p. 67）という課題が指摘されている。

これは思考の過程で常に目的と情報を照らし、その適否を判断する学習の過程を設定することで補うことができると考える。そこで「適切な情報源の選択、得た情報の評価、目的に応じた適切な加工などという、『過程』に関わる指導を行うこと」（「読むこと」（1）オの「指導する必要がある事項」）を踏まえ、過程を区分したワークシートを用いた（図3-1, 2）。これに基づき、課題設定の段階では自己の関心のありかと照らし、分析・整理の段階では引用と自己の意見を区別した上で、他者に勧めるとい

図3-1 ワークシート（裏面：課題の設定、情報の収集、分析・整理、まとめの区分）

図3-2 ワークシート（生徒作品）

4-2. 協働的な学習活動の設定（協働的な学習の日常化を目指す試行）

今回、主体的な学びの実現のために設定した主な協働的な学習活動は次の3点である（表4-1）。

表4-1 個人の学びと集団の学び①（「新書を読もう・伝えよう」）

	目 的	個 人	集 団	個 人	ふりかえり
インタビューゲーム (3人)	キーワードをたくさん出すための準備	質問項目を考える	視点を変えてインタビューしあう。	ドーナツチャートを記入する	キーワードを豊かにできたか
検索実習 (6人)	助け合いながら検索を行い、本を入手する。	新書マップOPACを活用して検索	不明点、疑問点を相談する。	得た情報をもとに書棚へ	目的とする本を入手できたか
発表 (6人)	発表を聞き、関心をもち、批評と評価を行う。	役割を担い、発表、批評を行う。	役割を担い、相互評価、批評を行う。	「次に読みたい一冊」を選ぶ。	発表と取組過程についての自己評価

①課題設定のためにキーワードを着想する場面（第1単元第1次）

個人で思考した事柄を、集団で拡散し、再び、個人の思考に収束する過程を設定し、キーワードを豊かにすることを目的とした。（前章にて既述。）

②図書館を利用する場面（連想検索システムとOPACの利用、ブラウジング）（第1単元第2次）

1人に1台ずつPCを用意し、連想検索システムとOPACを活用して検索する。その過程の操作や情報へのアクセスに関する疑問について相談して進め、互いに学びあう場とした。6人班（生活班）で班ごとに分けた可動式机で実施した。新書の蔵書は約9,000冊あり、8棟にも及ぶので協力して見つける姿や検索過程で確認し合う姿が見られた。

③本を紹介する場面（第2単元第2次）

個人で発表すると同時に集団で役割を担い、相互評価をする。個人の読書体験を集団の場で交流し、思考を拡散させた後、ふりかえりで収束させ、内省と次の課題の発見に生かすことを目的とした。

班（6～7人班）は話題が重ならないように組み、2回目はそれぞれ異なる班に分散させた。発表者、コメンテーター（批評）、ジャッジという3つの役割とそのローテーションを確認して進めたので、2分程度のサイクルでも活発な交流ができた。スピーチに不慣れな生徒もいたが、この規模が不安も少ないようで、2回目はそれぞれ工夫して伝えようとする意欲が見えた。「いいコメント」を目指す工夫も見られ、既習事項を生かして話しあうことができた。ふりかえりの「今回、学んだことと今後に生かしたいこと」の生徒の記述は、「新書を読もう*伝えよう新聞」（図1）の裏面に2クラス（78名）記載した（図4）。

今回は主に、個人で考えたことを集団で交流することにより、思考を拡散し、収束

2015年7月2日(木)

新書を読もう*伝えよう

(2)

今、学校のことを次に生かしたい、ことごとめました。

【練習と準備は大切】

○9年間たどってきたのスピ
ーチをしてきたので、アド
リブでやりくりできると思っ
たが、やはり練習が必要だとな
った。○ちゃんと準備しな
ないのじゃあ発表ができて
ないのでもちゃんと準備
したい。○ことと事前準備
すればよかった、と思いま
した。○もっと発表がススム
はずにいくように練習し
てから臨もうと思った。○こ
いさとなると上とか言葉
は出てくず、しどろもどろ
な話し方をしていた。これ
からから話すときもきはき
と話したい。○もっとと
人前でうまく話せるよう
に。○あまのりな思いま
した。○あまり前を向って話せ
なかつたので話せるよう
にしたい。○もっと何
も見ずに、みんなの目をみ
て話せるようになった。
○人の目を見ればよかった
をもっとできればよかった
と思った。○今、今度は話
すことを暗記したいと思
います。○もっと読誦が
できます。○ことと読誦が
ことと学んだ。○人前
で話すときは、自分じじ
りまゝとてから話すこと
が大切だ、思いました。

【一分間で伝える】
○時間を上手に使

【二分間で伝える】

○時間を上手に使うことができなかったから事前に内容をしっかりと事前で練習しようと思った。○一分という短い時間でスピーチを取るのに苦勞したので、今度はついに話をまとめるの難しさを話せるようにしたいです。○案外時間外だったのでいろいろ経ていったのかわかりにくくて難かった。今度はもっと伝えたいことを絞り込みたい。○短い時間で自分が言いたいことを伝えるのが難しかった。でも一回は一回目よりも伝えたいことがあったとまとめたのでよかったです。○一分で内容をまとめるのは思った以上に難しくて大変だった。○短い時間で自分の感想をおすポイント伝えるのは大変だなと感じました。自分自身が伝えたことをちゃんと整理してまとめることが大事だと思います。○自分は人前で話すことやまとめることが苦手なので、分という短い時間にならずと慣れていたかなら少すと思いました。

【伝わる楽しさ
伝える難しさ】

「**「伝わる楽しさ」**　**「伝える難しさ」**」

○楽しかったー！うーん、やっぱり発表するの、勉強になった！うーん、みんなの顔を見て話すのが楽しかった。ミフツシは上手くか
けていたと思います。取り上げた話題についてく
つた反応があつてうれしかった。そで、もう少し聞いてもらっている人の顔を見られたらよかったと思います。○今回、自分では満足した発表ができたと思っています。まだここには満足を設けてたくさん発表して発表するのになれた！と思
います。○人の顔を見て話すことがなかなか難しい
な！と思いました。○自分の伝えたいことを整理して伝えるのが難しかったです。○相手に伝えたいことを伝えるのは難しいことだと思いましたが、○人に本を勧めるのは難しいと思
います。○パターンの使うこと、これからやっていたことです。○全然できなかった。緊張して上手くいかなかった。○次は！しゃり前を見て相手を見て頑張りたい。

○みんながみ

伝える工夫

みんながみてくれるよ
う、分かるやうい説明を
と、その興味をひくよ
うなテーマで説明しました。

次回はミニフリップを
夫して分りやうくま
くみだと思った。次は
もう少し興味のわくよ
うなフリップを作りい
で、(話)もう一日に
フリップが、(人)の目に見
え、話したいことをと
く。発表したいことを、伝
えるように顔を見ながら
話とみんな聞いてくれ
るんだと思った。今日外
もこれから発表の機
会はあるので生かしてい
たい。もう少しフレ
ンをを加えて発表し
たいです。例えばグズを
いいます。例えばグズを
いいます。聞き手、興味
をもつと引ける。面白
いです。〇本について調
たり、考えをまとまり
たりすることはでき
ざ発表になった時、伝
えたいことを感じま
す。これに難しさを
た、それに限られ時間
中で発表するものな
か難しかったです。自分
たはあまり納得のい
スピーチとはななか
たけれど、参加するス
ーチがたくさんありま

「今度またスズ

リップの持ち方、目線
こえやす、声、表など

「今度またスピーチの機会があれば気を付けたい」と思いました。たぐくの本音が伝わることを、また伝わるので大切に学べるのでスピーチをして本心に良かったと思います。

手に興味を持てるものをつくることが大切だと思ってました。振り返ってみると前を付けていなかったかもしれないと気づきました。短くても興味が持てるように次が

【コメントも贈ろう】
コメンテーターは思ったより難しかったけれど、分岐点に気づいて、このことができた！コメントをするのが意外と人話を丁寧に聞く人と思えました。〇に伝えたいことも切れたし、聞いてくれたこと大助かりです。ありがとうございました。

【ご紹介ありがとうございます】
色々な事を知ることがあったので色々な本を読み、色んな分野の本があったので色々な本

と思った。○本
なりました。○

[illegible]

探し方も分か
用していこう

[illegible]

て良かったで
来に役立てた

[illegible]

た。

た上で、個人の学びが深まることを意図して協働的な学習形態を設定した。これは一人では考えに詰まるころやもう少し別の視点が欲しいところで、話し合う場面を設定すると目的が明確であり、意欲的に取り組む姿が窺えた。

古之

た、他の単元（評論「水の東西」、短歌・俳句「折々のうた」「作品」、古文（三））と並行して行うこと³⁾で、目標をもって計画的に読了を目指す計画性と

図4 「今回、学んだことと今後に生かしたいこと」(「新書を読もう*伝えよう」新聞裏面)

させた上で、個人の学びが深まることを意図して協働的な学習形態を設定した。生徒自身は一人では考えに詰まるところやもう少し別の視点が欲しいところで、話し合いや協力する場面を設定すると目的が明確であり、意欲的に取り組む姿が窺えた。

また、他の単元（評論「水の東西」、短歌・俳句「折々のうた」「作品」、古文「徒然草」）と並行して行うこと³⁾で、目標をもって計画的に読了を目指す計画性ととも

表4-2 個人の学びと集団の学び②（並行する単元「水の東西」第1次）

1 次	目 的	個 人	集 団	全 体	ふりかえり
意味段落に分ける (3人)	理由を明らかにして意味段落に分ける。	理由を考えながら、意味段落に分ける。	互いの意見を話し合い、班としての案を作る。	各班の案を理由を明確にして説明→共有	最初の各自案を見直す。

表4-3 個人の学びと集団の学び③（並行する単元「水の東西」第4次）

4 次	目 的	個 人	集 団①	集 団②	個 人
課題設定 (6人)	日本の伝統や独特の感性について考察する。	「日本らしい」伝統等を書き出す (マンダラート)	各自、思いついた意見を出し合う。	取り上げたものを話し合い、分担を決める。	分担した課題について考察する。

※この後、ワークシートを提出→点検後、全体で交流し、ふりかえり。

表4-4 個人の学びと集団の学び④（並行する単元との関連）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
新書	キーワード 3人班	検索 実習 6人班	個人で読書					発表 準備 一斉	発表 6人班 + 6人班	ふりかえり 一斉
			辞書 引き 3人班							
徒然草序段										
水の東西				段落 分け 3人班	読解 一斉	読解 一斉	考察 6人班			

に、他の単元で実施した協働的な学習形態（ペア、3人班、4人班、6人班）を活用する力を養うことも意図した（表4-2, 3, 4）。

1学期はまず個人の課題を設定し、その支援や拡充のために協働的な学習形態を試行したが、次第にスムーズに活動できるようになってきた。これを受けて2学期では目的を合意形成や情報の吟味など集団で話し合う必要性がより高い課題を試行している。また、3領域のいずれにおいても話し合う場面は設定することが可能である。学期の進行に合わせて、人間関係も考慮に入れながら、協働的に学ぶ手ごたえを感じさせることが「日常化」の実現に向けて課題である。

また、自己評価と相互評価について、今回は初めての相互評価の場であり、個人差が大きく見られた。また「ダメ出し」に終始している生徒には、疑問点としてその理由を考える、別の観点から見るなど助言の必要がある。今回の観点は「本の内容」「勧める内容」「聞き手を意識する姿勢」のそれぞれが明確か、また聞いた結果、関心がもてたかを4段階で評価した。「ひとこと」欄で数字では残せない印象やアピール

ポイントを簡単に記録するなど、短い時間を有効に活用してジャッジした様子がよくわかる。

自己評価については知識・理解に関すること、計画性、事前準備を振り返らせた。発表は充実していたが、過程で課題を残したことに気付くなど、「ふりかえり」も回数を重ねることで自己分析が的確になる傾向にある。協働的な学習に限らず、ふりかえりを積み重ね、次への課題を意識させることが主体的に学ぶ意欲を喚起する上で重要である。

5. 観点別評価の具体的な工夫

今回は学習活動の一つ一つが次の学習活動に繋がるものであり、いずれも「十分に満足できる」状態であってこそ次の学習課題が始められる特徴がある。ゆえに評価する場面を次の学習活動に必要な記述や行動で捉え、その「過程」を見取することで、評価を次の指導に速やかに反映することを狙った。本単元の具体的な評価規準については表5を参照されたい。

具体例として第1単元「新書を読もう」の観点「関心・意欲・態度」の評価の実際を挙げる。読了後、「KML チャート」及びブックレポートを完成させた第2次の終盤に評価した。評価規準は「読む目的を課題として明確に設定し、幅広く読書し、情報を適切に用いて、ものの見方、考え方を豊かにしようとしているかどうか」である。評価方法としてワークシート（W、L欄及びブックレポート）の記述を点検した。①「KWL チャート」を具体的に記述しようとしている。②ブックレポートにおいて引用と自分の意見を明確に分けて記述しようとしている。③勧めたい人や時を具体的に記述しようとしている。以上の①～③について十分、具体的に記述している生徒を「おおむね満足できる状況」(B)とする。

①においてWにおける課題設定が明確である、それに対する情報収集も十分である、あるいは②引用や抜粋した部分を考察した上で自分の意見を展開する生徒を「十分満足できる状況」(A)と判断する。一方、①の記述が不十分である、②が引用と主張の区別があいまいである等の生徒を「努力を要する状況」(C)とする。「努力を要する状況」(C)の生徒については、不十分である箇所を具体的に示し、課題を明確にして再度、読み取るよう促した。今回、これを再構成して1分間スピーチやミニ・フリップを構想するので、情報の分析や整理が不十分であると、発表に説得力を欠くことを理解させ、発表準備には調よう目安をもたせた。「努力を要する」と判断した生徒の中に声かけを行った結果、必要な箇所を読み直したり、分からない部分を調べて補ったりするなど発表準備に前向きな姿勢が得られ、結果的に満足できるスピーチに繋がったものもいる。躰ぎは次に生かす形で支援することも心掛けていく。

今後の課題としては評価の方法の工夫が残る。今回、どのように読んだのか（情報へのアクセス・取り出し）という点はレポートから、また情報の分析・整理の成果は

表5 観点別評価の具体的な評価規準

探究の過程	単元	次	学習活動	学習活動における具体的な評価規準	
				評価の規準	十分満足できる状況の具体例
課題の設定	「新書を読もう」	第1次	○キーワードを出そう	①評価の観点 ②評価の方法 【評価の規準】語句の意味、用法を正確に理解し、語彙を豊かにするとともに、自分の表現に役立てている。 ③知識・理解 ④ワークシートの記述の確認	関連する語彙がより多く出されている、独自に体系づけるなどの工夫をしようとしている。
		第2次	○「新書マップ」を使おう (図書館で読書実習)	【評価の規準】「新書マップ」、OPACのそれぞれの特性を理解し、必要な情報を取り出し、関心のある分野からより適した一冊を選び、ものの見方、考え方を豊かにしている。 ①読む能力	複数の新書を具体的な観点をもちて比較する、ブラウジングなど得た新書などもある候補に加えてより幅広く選書しようとしている。
			○情報収集	【評価の規準】目的に応じ、幅広く本を読み、情報を適切に用い、ものの見方、考え方を豊かにしようとしている。 ①関心・意欲・態度	「W」における課題設定が明確である、それに対する情報収集も十分である、あるいは②引用や抜粋した部分を考察した上で自分の意見を展開しようとしている。
			○情報の分析・整理	ワークシート「ワークシートの記述の点検 (W)」の記述の点検	不十分である箇所を具体的に示し、課題を明確にして再度、読み取るよう促す。今回、これを再構成して1分間スピーチやミニ・フリップを構想するので、情報の分析や整理が不十分であると、発表に説得力を欠くことを理解させ、発表準備には調よう目安をもたせる。
分析・整理	「新書を読もう」	第1次	○1分間スピーチの準備	【評価の規準】得た情報を精選し、相手を意識した内容で構成するために必要なことを理解している。 ①知識・理解 ②行動の確認 (視聴の様子、フリップや原稿作成の様子)	テレビの内容については全体で共有する中で再度確認させる。資料についてはまずは用途の再確認を行う。フリップは聞き手に示すものであること、勧める理由を簡潔に表現し、スピーチとともに提示するものであることのある点を確認した上で再度、構成を考えさせる。(自分で読むためのスピーチ原稿を書く場合があるため。)
		第2次	○ミニ・フリップ(A5判)を用い、1分間スピーチを行う。	【評価の規準】勧める相手や理由を明らかにして本を紹介し、その発表に対して自己評価や相互評価を行い、ものの見方や感じ方、考え方を豊かにしている。 ①話す能力・聞く能力 ②行動の確認 (発表時)、ふりかえりシートの記述の点検、分析	自己評価カードの「これまでの取り組み状況に対する評価」において準備が足りないことに自ら気づいているか確認した上で、返却時に計画的な取り組み方を考えさせる。また傾聴することに慣れていない場合もあるもので、個別に声掛けをする。同時に、しっかりと聞き取る課題を今後、組み入れ、全員が集中して話し、聞く態勢を目指したい。
		第3次	○「新書を読もう」*伝えよう 新聞でふりかえり	【評価の規準】ふりかえりを共有し、他の生徒の作品や意見や意見を自己の表現に生かそうとしている。 ①関心・意欲・態度 ②行動の確認	発表時にひどく失敗してしまつたと自己嫌悪に陥っている場合や、取り上げた新書が難しく十分に読解できなかったなど悔いを残している場合があるので、自己評価カードの返却時に本人の努力を認めたと、改善点や次回に繋がる助言をする必要がある。

ワークシートとフリップから見てとることができる。また当日の発表については同時に6班が行うので話す姿勢や聞く態度については2巡ほどで観察できるが、仔細に観ることは叶わない。即時性が伴う話すこと・聞くことならではの悩みである。生徒がより主体的に有意義かつ多様な言語活動に挑戦する機会を増やすことと、それをどのような方法で評価するかは指導上、不即不離の関係であり、今後も引き続き模索したい。

6. 今後の課題

今回、協働的な学習を課題設定と発表時に設定することにより、集団で得た学びを個人の読書に対する関心・意欲に結びつける効果が見られた。

生徒にとっては、試行錯誤しながらも、自分が選んだテーマから複数冊の本を見つけることができたという達成感は大きかったようである。これにより、自分で選んだ、自分の「課題」であるという意識をもち、「知りたいこと」を明確にして読了することができた（2週間で読了した生徒は98.75%）。その結果、紹介する活動へも意欲的に取り組むことができ、読書に対する意欲・関心を高める結果となった。今後もその意欲を継続させる取り組みを模索したい。

本単元は学年から見ると、7月から始まる「総合的な学習の時間」における探究的な学習への導入にあたる（表6）。この企画書にも情報源として新書を複数冊挙げる生徒も見られ、さっそく活用する場面が生まれた。学校あるいは学年規模でこの言語活動がどのような役割を果たすのかを意識して、教科並び他教科、その他の活動に成果と課題を繋ぐよう協働を心がけている。

また、協働的な学習活動において基盤となるのは、発信力と傾聴力、そして柔軟性である。今回は双方向性のあるコミュニケーションを目指し、関連して話すこと・聞くことも併せて指導した。1分間スピーチについては、この時期、まだ学校生活そのものに不安を抱える生徒も散見されるので、今回、実施した6,7人の班構成が生徒の感想としては「落ち着いて話せる」ほどよい規模であったようである。スピーチに苦手意識を持つ生徒でも「おすすめポイントは決めていた（話す材料は揃っていた）」という点では、相手を意識して効果的に話す工夫に集中させることができた。役割を明確にし、互いの意見を確認しながら話し合うことは、日々の言語活動で経験を積み重ねていきたい。

今回、取り上げた「適切なキーワードが挙げられない」事例などが示すように、生徒を取り巻く環境の変化は、語彙力や言語運用能力、ひいては思考力そのものにも大きく揺さぶりを掛けている。生徒の実態を見据えた上で今後、活用できる言語運用能力や思考力を育成し、より主体的・協働的に学ぶ姿勢を継続して養いたい。

表6 2015年度高校1年次図書館を利用する言語活動
～探究的な学習を協働して、指導するための課題一覧（案）～

実施時期		4月13日(クラス開き)	4月中旬	5月26日～7月2日	6月24日～2月17日	10月14日～11月13日
		春休み課題読書会	メディアオリエンテーション	新書を読もう*伝えよう	個人研究	校外学習 事前学習
言語活動		課題図書について班で話し合い、全体で交流する。	1人1冊を図書館の図書資料やwebを用いて回答する。	①新書マップを活用して発想を豊かにし、関心に応じたテキストを選ぶ。 ②選んだ新書の要点をまとめ、5～6人に伝える。	総合3分野に基づき、各自で選んだテーマを設定し、FWを経て、プレゼンテーションソフトを用いて発表する。	現地を訪れる前に事前にその場所や産業、実習内容について班で調べ、クラス全体で共有する。
担当		・企画→図書館教育係 ・実施(読書会、事後指導)→学年	・企画→図書館(司書、図書館教育部部長) ・実施、事後指導→総合学習係、学年	・企画、実施、事後指導→国語科	・企画→総合学習係 ・実施→学年(教員1人で生徒25人程度を指導)	・企画→行事係、総合学習係 ・実施→学年
課題設定		課題図書について各自が関心を持って読み進め	図書館が1人1冊ずつ設定する。	○各自の関心事から読む目的を設定 ①ドーナツチャートを用い、柔軟に発想し、キーワードを出す。 ②道徳検索システム「新書マップ」を活用し、新書を選ぶ。 ③KWLチャートで読む目的(「FW」を知りたいこと)を明確にする。	本校「総合」の3分野(人権、環境、国際理解・平和)に関するテーマを各自で設定する。	行き先に応じた班テーマが設定されている。
◇探究的な学習の過程◇	情報収集	学習活動	図書館の図書資料、webで調べる。	・KWLチャートで目的を明らかにしながら読書する。	①夏休みにフィールドワーク、取材、体験学習を各自で実施する。 ②①と併せて図書やweb上の情報を活用する。	図書館の図書資料、webで調べる。
		使用する媒体・教材	◆新書(課題の3冊から選ぶ)→	◆新書(各自で選ぶ)	(選択したテーマに応じて、図書、新聞記事など必要な情報を各自で選択する。)	
			◇JK(※1)と図書を併用して解答する	◇KWLチャート(※2)を利用		◇JKで基礎調査を行う。 その後、図書、Webで調査する。 ◇KWLチャートを利用する年度もあり。
	整理・分析	キーワードを10個挙げる。	集めた資料で問いに答えられるか検討する。	①KWLチャートに基づき、ブックレポートを作成する。 ②ブックレポートの要点に基づき、整理する。	①「分かったこと」(調査結果)と主張を明確に区別する。 ②複数の資料に基づき、客観的かつ論理的に展開できるよう情報を整理する。	班テーマについて、必要な事項を分かりやすく説明できるよう整理する。
	まとめ・発表	学習活動	班で討論テーマを決め、話しあう。	○勧める理由を明確にして1分間スピーチ ①「ミニ・フリップ」(A6判)を用いて、勧める理由を明らかにして話す。 ②相手を意識して話す・聞く。 ③役割(発表者、コンメンター、ジャッジ)を担い、他の発表を客観的に捉え、自己の表現に生かす。	①動機、調査結果、主張の展開を明らかにして発表する。 ②プレゼンテーションソフトを用いて、テーマに応じた表現の工夫をする。 ③聞き手を意識した話し方を工夫する。	①調査結果(班レポート)をまとめ、クラスごとに「しおり」を作成する。 ②班ごとに調査結果の要点をクラス全体に向けて発表する。
		形態	班発表(生活班(6人班)発表回数は1回)	班発表(話題が異なる6人班)発表回数は2回	個人がクラス(40人)に向けて発表 代表は学年(400人)に向けて発表	班(6人)で役割分担し、クラス(40人)に向けての発表
				発表時間の設定(1分間) →	発表時間の設定(3分間)	
必要なスキル		課題や目的に応じたツールが活用できる。	JKを活用して課題を解決するための情報を得る。 OPACを利用し、必要な図書資料等を検索できる。	※1)JK＝ジャパナレッジ ※2) KWLチャートは2年次古典B、3年次現代文B、古典Bでレポートを作成する際、継続して使用する。 「新書マップ」を活用して柔軟にテーマを設定できる。 「新書マップ」とOPACを併用して目的の新書を見つけることができる。	FW生について必要な情報を収集できる。 必要な図書資料や新聞記事を検索できる。	JKを活用して課題を解決するための情報を得る。 必要な図書資料、webを検索できる。
		参考文献、出典の書誌を正しく記録できる。	○	○	○	○
		内容や筆者の意見を適切に引用できる。	○	○	○	○

謝 辞

本稿は、第10回全国国語教育研究大会（国語教育実践改革会議（主催）、2015年8月2日実施）・研究主題「アクティブ・ラーニングを試行した国語の授業の提案」において、「事例発表」（高等学校部会）として口頭発表したものに基づき、作成した。発表にあたり、文部科学省初等中等教育局教育課程課の大滝一登教科調査官、国立音楽大学の新藤久典教授には多くの御教示を頂きました。また相山女学園大学教育学部の河野庸介教授には、発表準備から本稿を成すまで終始、御指導を頂きました。ここに記し、深く感謝いたします。

■注

- 1) 「新書マップ」とは連想検索機能を活用して、あるテーマに関連した新書・選書を瞬時に探し出すインターネット上の検索システムのこと。新書・選書以外の関連書籍も探すことができる。2015年5月現在で16,862冊登録されている。(http://shinshomap.info/search.php)
- 2) 阿辺川武 (2015) 「さまざまな検索と資料の活用」(高野明彦監修『検索の新地平』p. 174-179 (角川インターネット講座08), KADOKAWA, 2015年4月)
- 3) 本単元と並行して行った単元の中で協働的な学習形態をとったのは以下の通りである。
 - ・山崎正和著「水の東西」(4時間)
 - 第1次(1時)「意味段落に分けよう」(3人班)
 - 第4次(1時)「日本の感性を見つけよう」*
 - (6人班で課題作成→重ならないよう課題の担当を決めて考察)
 - *この学習活動は、建石哲男(2013)「高等学校定番教材『水の東西』(山崎正和)の教材分析と授業」(科学的「読み」の授業研究会『研究紀要15』2013年8月)を参考にした。
 - ・『徒然草』「序段」(1時間): 電子辞書を用い、古語を調べながら的確に現代語訳を行う(3人班)。

■参考文献

〈情報活用、汎用スキルについて〉

- 大滝一登 (2015) 「情報活用能力を高める三つの視点」(『実践国語研究』2015年1月号)
- 西辻正剛 (2015) 「国語科におけるジェネリック・スキルとは」(『日本語学』34(4), 437号, 2015年4月)
- 高野明彦 (2015) 『検索の新地平 集める, 探す, 見つける, 眺める』(角川学芸出版)

〈読書指導、図書館利用について〉

- 積山昌典 (2015) 「新書レポート一目的をもって本を読み, 自分の考えを深める」(富山哲也・杉本直美『中学校国語科 単元を通して課題解決を目指す言語活動プラン15』(東洋館出版社))
- 杉本直美 (2013) 『はじめよう学校図書館7読書生活をひらく「読書ノート」』(全国学校図書館協議会)
- 植村八潮 (2005) 『『新書マップ』による検索 連想によりアイデアを生む』(『印刷雑誌』88(8), 2005年8月)

〈探究的な学習の過程の指導について〉

- 桑田てるみ (編) (2015) 『学生のレポート・論文作成トレーニング 改訂版』(実教出版)
- 塩谷京子, 堀田龍也 (編著) (2013) 『司書教諭が伝える言語活動と探究的な学習の授業デザイン』(三省堂)
- 日本図書館協会図書館利用教育委員会, 図書館利用教育ハンドブック学校図書館(高等学校)版作業部会 (編著) (2011) 『問いをつくるスパイラル 考えることから探究学習をはじめよう!』(日本図書館協会)

〈アクティブ・ラーニング/協働学習/協同学習について〉

- 田村 学 (2015) 『授業を磨く』(東洋館出版社)
- 小林昭文, 鈴木達哉, 鈴木映司 (2015) 『現場ですぐに使えるアクティブラーニング実践』(産業能率大学出版部)
- 溝上慎一 (2014) 『アクティブ・ラーニングと教授学習パラダイムの転換』(東信社)
- 安永 悟 (2012) 『活動性を高める授業づくり—協同学習のすすめ—』(医学書院)
- 杉江修治 (2011) 『協同学習入門 基本の理解と51の工夫』(ナカニシヤ出版)

〈1分間スピーチについて〉

- NHK 「伝える極意」(「1分間で思いを伝える〜スピーチ〜」)(www.nhk.or/sougou/gokui/)

〈並行して行った単元に関するもの〉

- 山崎正和 (2015) 「私の国語教育論」(国語教室編集室『国語教室』101, 2015年5月)

建石哲男（2013）「高等学校定番教材『水の東西』（山崎正和）の教材分析と授業」（科学的「読み」の授業研究会『研究紀要』15, 2013年8月）

〈単元の構想に関するもの〉

大滝一登（2011）「『理解』と『表現』をつなぐ『思考力』の育成」（『日本語学』30(10), 383号, 2011年8月）

藤原真子（2014）「『読解力』の結果をどう見るか」（『中等教育資料』936, 2014年5月）

富山哲也, 杉本直美（2015）『中学校国語科 単元を通して課題解決を目指す言語活動プラン15』（東洋館出版社）

文部科学省初等中等教育局教育課程課（2015）「社会に開かれた教育課程を目指して～中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会における論点整理～」(『中等教育資料』953, 2015年10月)

田近洵一, 鳴島甫（編著）（2013）『中学校・高等学校国語科教育法研究』（東洋出版社）

田中宏幸, 大滝一登（編著）（2012）『中学校・高等学校言語活動を軸とした国語授業の改革 10のキーワード』（三省堂）

西辻正副（編著）（2012）『国語の授業を変える2 評価規準をどう生かすか 高校国語総合編』（明治書院）

河野庸介（2010）『国語科授業にスリルとサスペンスを』（教育出版）

田中孝一（監修）, 西辻正副・富山哲也（編）（2007）『中学校・高等学校 PISA 型「読解力」考え方と実践』（明治書院）